

工藤篤子メールマガジン91号 2006. 9. 12

●「炎のランナー」～「エルサレム」 ●メティカフ先生 ●ブルックリン・タバナクル・クワイヤー

ハンブルクは、日に数回雨の降る日もありますが、時に、どこまでも抜けるような秋空の広がる美しさは、素晴らしいものです。

皆様、お変わりありませんか？

私の方は、日本へ行くまで、あと4週間となり、本腰を入れて準備を進めているところです。

ところで、今年の夏は、実に多くの感動的な賛美に出会うことができました。

今日は、皆さんに、そのいくつかをご紹介させていただきたいと思います。



(写真上右:ハンブルク、ランドゥングスブリュッケ 吉野輝雄さん撮影)

●「炎のランナー」Chariot of Fire～「エルサレム」

5月にメキシコに行った際、カルロス師が、「いつか Atsuko に歌って欲しい賛美歌がある」といって、「炎のランナー」という映画のビデオを見せてくれました。「炎のランナー」(原題:Chariot of Fire「火の戦車」)は、ご存じの方も多いたと思いますが、1924年のパリ・オリンピックに出場したエリック・リデルというイギリス人選手の実話をもとに映画化されたものです。エリック・リデルは、オリンピック開会直前に、彼の出場予定である100メートル走が日曜に当たっていることを知りました。敬虔なクリスチャンであった彼は、日曜の礼拝を守るために出場を辞退します。そこで、他の種目ですでにメダルを獲得していた友人が、400メートル走の出場枠をリデルに譲り、リデルがそれに出て優勝するのです。

「炎のランナー」には、もうひとりの主人公がいます。やはり実在したハロルド・エイブラハムというユダヤ人で、ユダヤ人への差別と偏見に立ち向かいながら、100メートル走で金メダルを獲得します。ハロルドは、その後、弁護士、キャスター、スポーツ組織指導者として活躍し、1978年に亡くなりました。映画の最後にハロルドの葬儀のシーンがありますが、そこで歌われているのが「エルサレム」という実に美しい賛美歌です。

しかし、どの賛美歌集を探しても「エルサレム」がありません。けれども、ドイツへ戻ってから、思いがけず、手持ちの曲集の中に見つけることができ、さっそくさらい始めました。

「エルサレム」

そしてその昔、それらの足は わが祖国(原詩ではイングランド)の緑の山々を歩んだのだろうか？

そして聖なる神の小羊は わが祖国の心地よい牧草地に居たのだろうか？

そしてその聖なる御顔は 私たちの曇った丘に輝いたのだろうか？

そしてこの地にエルサレムを建てられたのだろうか？

暗いサタンの粉ひき場となった地の間に？

私の金の弓を持ってきてください！
私の希望の矢を持ってきてください！
私の槍を持ってきてください！
ああ、空を覆う雲よ、晴れよ！
私の火の戦車(Chariot of Fire)を持ってきてください！



私の心は決して戦うことをあきらめない
この手の中で、剣が眠りにつくこともないだろう
ここ、わが祖国の緑多き美しい国にエルサレムを築くまでは！

(写真上：スイス、アッペンツェラー 松林幸二郎さん撮影)

●メティカフ先生

そのような折、8月にスイスで行われた「日本人キリスト者の集い」で、日本で38年間宣教なさっていたスティーブン・メティカフ先生に再会し、以下のことを思い出しました。

メティカフ先生はイギリス人ですが、ご両親が宣教していらした中国で生まれました。第二次世界大戦中は、中国を侵略していた日本軍によって、収容所に入れられ、その収容所で「炎のランナー」エリック・リデルに出会ったのです。エリック・リデルは、スポーツマンとしてのキャリアをすべて投げうって、当時中国で宣教師として働いていました。収容所での日本兵の中国人へのむごい仕打ちを見せつけられ、メティカフ先生を始め、収容所の少年たちが、その行為をどうしても赦すことが出来なかったとき、エリック・リデルはこう言ったそうです。

「聖書には『迫害する者のために祈りなさい』と書いてある。ぼくたちは愛する者のためなら、頼まれなくても時間を費やして祈る。しかし、イエスは愛せない者のために祈れと言われた。だから君たちも日本人のために祈ってごらん。人を憎むとき、君たちは自分中心の人間になる。でも祈るとき、君たちは神中心の人間になる。神が愛する人を憎むことはできない。祈りは君たちの姿勢を変えるんだ。」

「聖人のような人物だった」エリック・リデルは、収容所で脳腫瘍になり、43才という若さで天国へ帰ってゆきました。メティカフ先生はそのとき、「もし僕が生きてこの収容所を出られる日が来たら、きっと宣教師になって日本に行きます」と祈ったそうです。そして神は確かにその祈りをお聞きくださり、その数年後、メティカフ先生は宣教のために日本へと向かうことになったのでした。

以上のことを理解して歌うとき、賛美の思いもさらに深められたものとなってゆきました。この「エルサレム」を今年の秋のコンサートで賛美させていただく予定です。

*メティカフ先生とエリック・リデルについてもっと詳しくお知りになりたい方は、「闇に輝くともしびを継いで」(宣教師となった元日本軍捕虜の76年)スティーブン・メティカフ著:いのちのことば社フォレストブックスを是非お読みください。実に感動的な内容です。

●ブルックリン・タバナクル・クワイヤー Brooklyn Tabernacle Choir

5月のニューヨークでのコンサートの際、ニュージャージー日本語教会の錦織先生から Brooklyn Tabernacle Choir の "I'm Amazed" というライブ DVD をいただきました。400人の聖歌隊全員が心から捧げる賛美を聞きながら、最初から最後まで涙が止まりませんでした。それは、キリストの栄光が輝いて見える賛美、真に御霊に溢れる賛美、福音を語り告げる賛美でした。この賛美を聞いたなら、きっと多くの人々が癒され、神の臨在を感じ、キリストの救いに触れることができるだろう、そう思いました。

聖歌隊リーダーのキャロル・シンバラさん(ジム・シンバラ牧師夫人)は、2005年に来日した際、ワークショップの前にこうおっしゃったそうです。「私たちは、聴衆の皆さんを喜ばせるためのパフォーマンスはしません。私たちの活動は、ゴスペルの主役である、イエス・キリストを紹介するのが本来の目的なのです。」

別のCDジャケットにはこう書かれてありました。「私たちの教会は、様々な人が集まっています。ホームレス、金持ち、白人、黒人、アジア人、ラテン系…でも私たちの選択する道は、二つしかありません。イエス・キリストに真に自分自身を捧げる道か、そうでないかの道です…今の教会の多くは、たくさんのプログラムに忙しくなって、少ししか祈りません…」

牧師のジム師は、1970年代に Brooklyn Tabernacle に遣わされた時、自分の無力さを痛感し、主に祈る以外方法がなかったと言います。そうして、これまで30年以上、いつも祈りながら、主の働きだけを求めて歩いていらしたのだそうです。Brooklyn Tabernacle Choir の賛美の多くは、祈りの中で生まれてきたものだそうです。ほとんどの人が楽譜も読めず、だから楽譜もなく、口移しで自分のパートを習って、祈りと共に練習を重ね、主を賛美し、祈り、そしてまたほめたたえ…そのように単純で、ただ御霊の導きによって、ゴスペル(福音)の本質から決してそれることのなかった賛美を、30年以上捧げてきました。

やっと自分の目指す「賛美者」(礼拝者)にめぐり会うことが出来た、そのような喜びとともに、彼らの賛美を聞きながら、毎朝共に、主に感謝と賛美を捧げさせていただいています。

●お祈りください

1. コンサートの準備を主の導きによって進めることができますように。
何よりも、主との交わりが深められ、私の霊性を主が整えてくださいますようお祈りください。
 2. 中国語の Y 先生の救いのために
(11月の中国宣教のために、週に一度、中国語を習っています。Y 先生のことは次回のメルマガでお分かちさせていただきます)
 3. 声楽の生徒 G さん(ドイツ人)の救いのために(彼女はとても心開いています)
 4. 9月3日、ハンブルク日本語教会にて、井野葉由美宣教師の就任式が行われました。
どうぞ井野宣教師の尊い働きのため、教会の祝福のためにお祈りください。
-

今回は、とても長いメルマガになってしまいましたことをどうぞお許してください。
それではまた2週間後にメルマガをお送りさせていただきます。
主の恵みとご愛が、皆様の上に、溢れんばかりにありますように！

工藤篤子